

# 幼児と保育者の関わりの理解を深めるための指導に関する一考察 — 保育内容「人間関係」の課題の分析を通して —

Dalrymple 規子<sup>1)</sup>

## Study of How to Teach 'Understanding the Relationship between Children and Teachers' — Analyzing students' writings about "Human Relationships" in Childcare and Education —

Noriko DALRYMPLE

保育内容研究「人間関係」の授業の指導全体において、学生たちの「観察力」「考察力」について研究してきた(Dalrymple, 2017)ものに引き続き、さらに、幼児と保育者の関わりの理解に焦点を当てて、学生の記述したものを詳細に分析し、記述量及び記述していること、幼児の姿・思い、保育者の姿・思い、そして幼児と保育者の間で起こっていることをそれぞれを考察した。結果は、記述量が多い学生に関しては、課題を繰り返す中で、そのやり方を学修し、理解が深まっていることが推察された。記述量の少ない学生においては、保育者として子どもの見方のスタート地点には立っていることが見いだされ、その後の筆者の指導の工夫が必要であることが示唆された。どちらの学生も、課題の出し方で、書き方が左右されるため、筆者の課題の出し方も再考する必要があることが見られた。

キーワード：幼児と保育者の関わりの理解、考えていく力、書くこと

### 1. はじめに

昨年度、幼児教育学科2年生が履修している保育内容研究「人間関係」の講義で取り組んだ学生たちの記述式の課題から、彼らの「観察力」「考察力」がどのように身につけているのか、あるいは身につけていないのかについて、研究を行った(Dalrymple, 2017)。そこでは、子どもや保育者の姿やその背後にある思いについて、その力動が見えるように具体的に記述ができていっている学生がいる一方で、設問自体の意味が明確に把握できていないと思われる記述を続けている学生がいることが分かった。

そこで今年度は授業における記述式課題をもう少し具体的にしながら、「学生が自分で考えていく」ことを重視することにした。そして、今回の研究に

おいては、特に幼児と保育者とのやりとりに焦点を当てて、学生たちが考えたことを記述する課題を取り上げて、一人一人の学生の育ちを見ていく視点を考えていくとともに、どのような指導が可能であるか探究していく。

尚、今年度の授業のシラバスは下記のとおりである。

- ① オリエンテーション、東田直樹さんの特集を視聴して
- ② 親子について考える「ママたちが非常事態!」を視聴して
- ③ 親との出会いと関わり
- ④ 保育者との出会いと関わりーリョウガ君(3歳児)のビデオ(小田, 2005)を見て
- ⑤ 友達との出会いと関わりー事例を読んで…事例を考えるとはどういうことかー

1) 短期大学部幼児教育学科

- ⑥ 子どもと保育者の関わり i) : 身体で、感じてみよう。事例分析
- ⑦ 子どもと保育者の関わり ii) : 各グループでの事例分析
- ⑧ 子どもと保育者の関わり iii) : 各グループによる事例検討発表会
- ⑨ 遊びの中の人とのかかわり i) リョウガ君(4歳児)のビデオ(小田, 2005)を見て
- ⑩ 遊びの中の人とのかかわり ii) 保育実習のエピソードも振り返りながら・事例分析
- ⑪ あそびのまとめ+堀合先生のビデオ(実践保育研究会, 2001)
- ⑫ 生活を通して育つ人とかかわり
- ⑬ 個と集団の育ち
- ⑭ 人とかかわりをみる視点 i)
- ⑮ 人とかかわりをみる視点 ii)

## 2. 研究方法

本学幼児教育学科の2017年度保育内容研究「人間関係」履修学生(2年生)94名の中から、記述式課題の記述量の多い学生1名(以後、学生Aとする)、記述量の少ない学生1名(以後、学生Bとする)を選んだ。さらに、分析する課題については、授業15回すべてに課題があったうち、特に幼児と保育者のかかわりに焦点を当てているものを抽出した。抽出した課題は、第4回「保育者との出会いとかかわり」・第6回「子どもと保育者の関わり—事例分析」第9回「遊びの中の人とのかかわり」である。そして、学生A・Bそれぞれが記述している内容を詳細に分析していきながら、1)記述されていること 2)幼児の姿と思い 3)保育者の姿と思い 4)幼児と保育者の間で起こっていることについての記述についてそれぞれ考察した。

各回の課題は次のとおりである。

第4回「保育者との出会いとかかわり」:

DVD教材「3年間の保育記録①よりどこを求めて」より、3歳児のリョウガ君の1年間の映像を見ながら、それぞれのシーンにおいて、①リョウガ君の姿 ②リョウガ君の思い ③先生の気持ち ④先生の行動 について観察して、気づいたこと・感じたこと・考えたことをできるだけたくさん書く。

第6回「子どもと保育者の関わり—事例分析」:

教科書「事例で学ぶ保育内容 領域人間関係(岩立京子編者代表 萌文書林, 2008)の事例3-1(p.59)を取り上げ、事例の文章から子どもの様子、保育者の様子を時系列に取り出し、その様子の下にそれぞれの思いを書く。

第9回「遊びの中の人とのかかわり」:

DVD教材「3年間の保育記録③先生とともに」より、4歳児のリョウガ君の1年間の映像を見ながら、それぞれのシーンにおいて、①リョウガ君の姿・思い ②先生の思い・関わり・配慮 について気付いたこと・考えたことをできるだけ詳しく書く。

## 3. 結果

### (1) 第4回「保育者との出会いとかかわり」

シーン1:初めての幼稚園生活のはじまり(4月)について

(学生A)

- ①戸惑っている姿がある。不安なので紙飛行機を持っている。少し母親が離れると泣いてしまう。
  - ②新しい環境に対して不安に気持ちがある。遊びたいという気持ちはある。お母さんと離れたくないという気持ちがある。
  - ③リョウガ君の気持ちを受け止めてあげようとする気持ちがある。子どもたちにまだ遊びたいという気持ちがあるときは、受け止めてあげようとする気持ちがある。
  - ④お母さんにも気持ちを受け止め、声をかける。「リョウガ君、○○しようよ」と声掛けをし、気持ちの切り替えをさせるようにしていた。お迎えの時間が来たときは、無理に遊びをやめさせようとはせず、まず、子どもの気持ちを受け止めて、一緒に遊具に乗るとのこと。
- \*次第にリョウガ君は気持ちが落ち着き、不安な気持ちがなくなってきた。友達とかかわるが出てきた。

(学生B)

お母さんが作ってくれたものを持っている(心のよりどころ)。  
自分の作ったものを受け止めてくれる人を探している(姿→誰かを探している。先生の行動→一つ一つの行動に声をかける。)

### 1) 記述量及び記述されていること

このシーンでは、初日とその次の日のリョウガ君の姿が出てきているが、学生Aは、記述量が多い。その理由は次のように考えられる。自分が捉えた子どもの姿①、保育者の姿④をできるだけ、書き記そうという努力が見られる。また、子どもの場合は、その姿からみられる子どもの思いを複数可能性として考えている。保育者の場合は、その子供の姿を見て、どのように感じていたかを自分なりに探究しようとしているのが分かる。

学生Bは、記述量としては少なく、①～④に分けては書いてはいない。恐らく書くことが苦手な学生であろう。しかし、後述のように、子どもの姿や思い・保育者の姿に気づいていないわけではないことは分かる。

### 2) 幼児の姿と思い

学生Aは、例えば、「戸惑っている姿」というものが実際には、どのような行動（うつむいている、とか、落ち着かないように身体を左右に揺らしながら、など）とそこに感じられる思い（戸惑っている、不安等）と分けてみていく力は少し弱いものの、映像の中にどのような子どもの姿が見えるかを見つけていこうとしているのが分かる。ここでは、戸惑っている姿、（不安で）紙飛行機を持っている姿、母親が離れると泣いてしまう姿の3つを記述し、最初の2つの姿に対して、②において、新しい環境に対する不安、最後の姿に対して、分離への抵抗という気持ちを考えている。同時に、姿には記していないが、リョウガ君の園生活に対する肯定の部分－遊びたいという気持ちがあることも、見出している。

学生Bは、リョウガ君が紙飛行機を持っている姿について「お母さんが作ってくれたものを持っている」と記し、その後に思いというよりは、紙飛行機のリョウガ君にとっての意味を、括弧書きで「心のよりどころ」を記述している。DVDのナレーションにも、そのようなコメントが入っていたが、多くコメントされていた中で、その部分を選んだということが大切なことと思われる。その次の記述においては、映像では、リョウガ君が、砂場で手にお皿を持ちながら左右を見ている姿があるが、その部分のコメントが「自分の作ったものを受け止めてくれる人を探している」であった。その部分を記述しながら、

その後、括弧書きに姿として「誰かを探している」とある。恐らく、このところは、学生Bにとっては、コメントと同様の文章が、子どもの思いであり、その姿を括弧の中に書いたのであろう。

### 3) 保育者の姿と思い

学生Aが記述している保育者の姿と思いは、その前に記述した子どもの姿①・思い②に呼応しているようにも思うし、このシーン1の中で見られた他のリョウガ君の姿に関わっている時の保育者の姿と思いのようにも思われる。そここのところは、はっきりしていない。しかし、どちらかのシーンにおいての、子どもの姿・思いを受けての保育者の姿と思い、という関係性の中で保育者が子どもの姿をどう受け止め、子どもをどう理解し、自分自身のかかわりにつなげていったかを考えていこうとしているのが、「受け止めてあげようとする気持ちがある」「受け止めて、一緒に遊具に乗る」という記述からも見える。

学生Bは、大雑把ではあるが、先生の行動を「一つ一つの行動に声をかける」と、映像の中の保育者の行動を捉えてはいる。それが「自分の作ったものを受け止めてくれる人を探している」と記述した後の括弧書きに書かれているのは、その子どもの姿と思いとも、この保育者の行動がかかわっていることを意味してもいるのであろう。

### 4) 幼児と保育者の間で起こっていること

課題自体が「幼児と保育者の間で起こっていること」を問いてはいないので、学生Aも学生Bもはっきりとは記述していない。しかし、学生Aについては、子どもの姿①と思い②につなげて、保育者の思い③を考えていっているのが、読み取れる。一方、学生Bは、前述したが、保育者の姿を恐らく子どもの姿と思いにつなげているのではないだろうか、と推測はできなくはないが、はっきりとはわからないため、ここでは幼児と保育者の間で起こっていることを掴んでいるとはいえないであろう。

## (2) 第6回「子どもと保育者の関わり―事例分析」

これは、普段の保育とは違う少し遅い時間から保育が始まった日の子どもの様子の事例である。どの子も落ち着かない様子で登園していることが概略として述べられたのち、子ども（B夫）の様子が述べ

られている。課題では、最初の部分の、親子の様子で書き方の例を下記のように示し、それぞれの課題に取り組むようにしていた。

(学生A)

<子>帰っていく母親を目で追いながら、「ママー」と泣いている。

(思い)お母さんと離れたくない。不安な思い。

<保>抱き上げて保育室へ入った。

(思い)まずは、落ち着かせてあげよう。言葉ではなく、体で安心させてあげよう。

<保>庭に面した窓のそばに連れて行く。「ヒーちゃんも一人だね」「案山子さんも一人だねえ」合鴨、案山子を指さして語りかける。(a)

(思い)B夫くんも、共感することのできるよう、または興味もてるように話しかけてあげよう。B夫くんももしかすると納得して落ち着くかもしれない。

<子>すぐに保育者の方に顔を埋めてしまい、なかなか泣き止まない。

(思い)やっぱりまだお母さんと離れてしまったことが悲しい。不安な嫌な思いが残っている。

<保>保育者が「あれ?」と何かに気づき、「Bちゃん大変だ。案山子さんの傘が落ちちゃっているよ。直しに行こうか?」と提案した。

(思い)B君が今度こそは、興味を持ってくれるのではないかと思っている。見ているだけでなく、直しに行く行動をすれば、気が少しはまぎれるかも知れないと思っている。

<子>泣き止んで、じっと案山子を見つめた。

(思い)案山子さん、傘が落ちちゃって困っているのかな。大丈夫かな?という思いになった。気になっている。

<保>B夫の様子を見て、「じゃあ、クツを履き替えようかな」とB夫を抱きかかえたまま、靴箱へ向かった。

(思い)B夫くんが興味を持ってくれてよかったなという思いと、気持ちが落ち着いている様子が分かるなという思い。次の行動に向かえるように声掛けをしようという思いもある。(a')

<子>保育室の入り口付近で、牛乳の空き箱を使って製作をしている2人の男児に気づき、じっと見つめるB夫。(b)

(思い)何か楽しそうなことをしているな。僕もやってみたいな、という思い。興味がある。

<保>B夫の視線に気づき、「何つくっているの?」と男児たちに話しかけた。

(思い)何か、B夫くんが興味があるような感じで見ているな。自ら興味を持っていることの方が大切だろう。ここはきっかけを作るべく話しかけてみよう。

《教科書より-1人が「中央線!」と言って、つくりかけの中央線を保育者に見せた。》

<子>「中央線知ってる」と小さくつぶやく。

(思い)僕も中央線は知っているよ。友達にも教えてあげたい。共感したいという思い。

<保>「中央線つくる?」とB夫にたずねる。

(思い)気持ちの後押しをしてあげよう。(小さな声で言っている様子から、まだ自分から勇気を出していないことが分かるから。)

<子>「うん」とうなずいた。

(思い)やりたいな。一緒にできるのは嬉しいな。わくわくする気持ち。(b')

<保>B夫を床に下ろす。

(思い)自分からやってみたいと思えたことはよかったな。安心する気持ち。

<子>ずっと背負っていたカバンをロッカーに片づけに行き、制作コーナーに戻ってくると、材料棚に置いてある牛乳の空き箱を選び始めた。その後は先につくっていた男児と一緒に黙々と電車を作り、つくった電車を床に並べて動かして遊んでいた。

(思い)早く遊びたいからカバンを片付けよう。わくわくする気持ち。一緒に遊べることの喜び。

(学生B)

<子>「ママー」と泣いて、靴箱のそばに座り込んだ。

(思い)ママと離れたくない。

<保>抱き上げて窓の外を見せる。

(思い)気持ちをこちらに向けてもらう。

<保>傘を直しに行く。

(思い)いろいろなところに意識を向ける。

<子>中央線

(思い)お友達が楽しそうなことをしている。

<保>B夫をおろす

(思い)興味のあるものがあつたので楽しんでもらう。

<子>カバンをしまい、制作コーナーへ行く。

(思い)遊びたいものが決まった。

<子>電車を作り、動かして遊んだ。

(思い)楽しく遊んだ。

### 1) 記述量及び記述されていること

この第6回の課題は、教科書の事例をまずは、子どもの行動、保育者の行動に分けて、その流れの通りにプリントに書いていくというものである。プリントには、〈子〉〈保〉と一つ一つの姿が、事例の流れに沿って書けるようにしている。(思い)も〈子〉〈保〉それぞれの下に書く欄を設けている。

学生Aは、その課題に忠実に取り組んでいることが、教科書の事例と照らし合わせながら、記述を見てもわかる。一方、学生Bは、記述量が少なく、この事例そのものを行動ごとに分割していくという作業に何らかの困難さを感じている様に思われる。しかし、この一つ一つを細かく見ていく、という作業は苦手ではあり、後述するように、その思いを考えていくことも、詳細にしていくことは難しいようであるが、全体的には、捉え方や理解の仕方は決してずれてはいない。大雑把ではあるが、これをスタートとして、徐々に細かく見ていくトレーニングをしていくことは可能であろう。

### 2) 幼児の姿と思い

学生Aは、一つ一つの子どもの行動から考えられる子どもの思いについて、その場で感じているであろういくつかを、推測し記述している。例えば、最初の「ママー」と泣いているシーンを、二つの思い-「母親と離れたくない」と「不安な思い」としている。保育者が目に見えない子どもの心について考えていく時に、子どもが感じているに違いないと思うものが一つだけということは、ほとんどあり得ない。「不安」という言葉で、言い表せることは多くあるが、それがどのような状況からくるのが、何がその引き金になっているのか、様々なことを考えていく必要がある。そういった意味では、ここで、母子分離が不安の引き金になっていると考えたのは「子どもが不安になっている」のもう一つ深いレベルのことを考えていける能力を持っている、あるいは身につけようとしているという意味で、非常に大切なことであると思われる。

学生Bは、幼児の姿がかなり大雑把ではあるが、3つ記述がある。事例の記述に沿った書き方にはなっていないが、それぞれについては、決して間違っていないし、その思いについても、全く的外れではない。これはあくまでも憶測ではあるが、例えば

“傘を直しに行く”の思いが、“いろいろなところに意識を向ける”とあるが、これは、学生Aの斜体部分(aからa'までの部分)を学生Bなりに含めているように思われる。同様に子どもの姿に“中央線”と記述され、その思いが“お友達が楽しそうなことをしている”とあるところも、学生Aの(bからb')の部分が含まれているように思われる。ただし、これはあくまでも憶測であり、学生Bが、的確に自分の思いを伝えるためには、この記述では不十分であることが分かる。また、思いの部分に関しても、短い言葉でシンプルに書いてある。ここに書かれた思いは、子どもの思いを一言でいう場合には、的確ではあると思われる。しかし同時に、保育者が現場で、子どもを見ていく時に、そこでその子どもについて考えることを止めてしまう危険性にもつながるようにも思われる。学生時代は、できるだけ様々な思いを考えていけるようにしていく必要がある。

### 3) 保育者の姿と思い

学生Aは、保育者の姿と思いも、2)と同様に、記述している。また、子どもの姿・思いに対しての保育者の思いが、その“応答”として、どのシーンにも書かれている。例えば、案山子の傘が落ちているのをじっと見つめているB夫の姿に保育者が「靴を履き替えようか」と言っている姿に、“B夫君が興味を持ってくれてよかったなという思いと、気持ちが落ち着いている様子が分かるなという思い。次の行動に向かえるように声掛けをしようという思いもある。”と記述している。ここには、それまで、いろいろ声をかけてもなかなか落ち着かなかったB夫の変化への保育者の安心な思いという、そこまでのやり取りや流れの積み重ねが感じられる。また、そこで子どもが自分から動くのを待つのではなく、もう一歩先の行動へと動けるように子どもの背中をそっと押しながら導く保育者の役割の部分をも思いの部分で言葉で表現できている。

学生Bは、幼児の姿・思いと同様に、保育者の姿と思いも、かなり大雑把で、かつシンプルではあるが、記述した部分に関しては、間違っていない。これを基本にもう少し膨らませていけるようになるという。

#### 4) 幼児と保育者の間で起こっていること

2)・3) からわかるように、学生Aは、子どもの姿・思いを受けて、保育者の思い・姿があり、それを受けてまた、子どもの姿・思いというように、両者にやりとりが見えてくるような記述となっている。そして全体的には、B夫が不安な状態に、寄り添いながら安全基地として存在しようとする保育者がいて、次第にB夫が自ら動き始めるまでの両者の見える部分・見えない部分のやり取りと流れが詳細に言葉として表現されている。

学生Bも、子どもの姿・思いに対して、それに呼応するように保育者の思いがあって保育者の行動があることはわかる。例えば、ママと離れたくないB夫の行動に対し、“気持ちをこちらに向けてもらう”ために、“抱き上げて窓の外を見せる”ようにしたり、“いろいろなところに意識を向ける”ために、“傘を直しに行く”ようにしたりしていることを捉えている。また、友達が楽しそうなことをしているのを見つけたB夫に対して、“興味のあるものがあつたので楽しんでもらう”という気持ちから“B夫をおろす”という行動をとったところもそうである。つまり、両者の間には、保育者は、子どもの姿・思いを感じ、捉え、その理解から子どもの心に寄り添おうとしているのではないかと、ということが起こっていることは、見て取れる。一方で、保育者の姿から、子どもがどのように感じたかは、学生Bの記述では読み取れないので、学生Aのような全体としての流れを読み取るのは難しい。つまり、学生Bは、一つ一つを細かく見ながら、そこでの思いをやりとりの中で考えていくということは苦手であるが、全体的には、捉え方や理解の仕方は決してずれてはいないということであり、大雑把ではあるが、ここをスタートとして、徐々に細かく見ていくトレーニングをしていくことは可能であろう。また、思いもここからもう一歩深めていくことはできなくはないように思われる。

#### (3) 第9回「遊びの中の人とのかかわり」

シーン6：相撲が大好き一子ども会活動へ(11月下旬)

(学生A)

- ①相撲を友達としてとっても楽しそう
- ②一緒に遊び
- ①劇ごっこをする。お相撲を取り入れる。楽しそう。
- ②リョウガ君の好きな相撲を取り入れようとする。
- ①小道具作りを友達とする。
- ②友達がお面を作った様子を見て、リョウガ君にも見せる。
- ①次の日になるとお面作りを先生とやる。作り終えたら、お面を被り楽しそうに歩く。
- ①マットの上でお相撲をする。その後、フラフープを使い、友達と遊ぶ。ケンケンパをする。
- 劇遊びを普段の中から取り入れることで、子どもの意欲を引き出す工夫をしていた。またリョウガ君のように、行事に参加しようとしないうちから子どもであったが、リョウガ君の好きな相撲を取り入れることにより、より伸び伸びと活動することができていたことが良く伝わりました。

(学生B)

イメージを共感する。  
自分で作ることが大事ということはとても共感できると思った。人にやってもらうのと自分で作るのでは違う。

#### 1) 記述量及び記述されていること

この第9回の課題は、第4回での課題と基本的には非常に似ている。遊びのシーンの中での保育者と子どものやりとりを見ていく課題として出している。

学生Aは、今までの課題に比べると記述量は少ないが、それは課題のスペースの問題もあったかと思われる。学生Aは、他の学生と比べると多い方のグループに入る。また、課題には、①子どもの姿・思い ②保育者の思い・関わり・配慮 と出したが、思いも書いてはいるが、姿の描写の方が多い。これは、著者の課題の出し方を、今までのように行動と思いを別々に分けて書くようにはしなかったためであると思われる。しかし、この第9回での記録を第4回の課題と比較すると、第6回での事例を丁寧に見ていくという課題で学修した、時系列にやりとりを見ていくことが身についていることが、子どもの姿と保育者の姿を順番に記述しているところから推測される。さらに、黒丸の記述をしているところは、学生A自身が自分から描いたものである。

そこから見えてくるのは、学生Aが、このビデオの最初からのリョウガ君の姿を念頭にしながら、保育者がどのように子どもを理解し、その子に合った配慮を行い、ここまで成長した子どもの姿を捉えているということである。

学生Bは、記述量はかなり少ない。ただし、書いている内容については、恐らく保育者の姿勢を記述し、それに対しての自分の考えを述べていると思われる。そして、その時の子どもの体験について想像してみたのであろう。“イメージの共感”という表現がこのシーン6に一致するかどうかは別としても、保育者が子どものイメージを捉え、それをより具体的な形にしていくことを、学生Bがこのシーンから感じているのではないだろうかと推測される。特にリョウガ君がお面を作ったり、行司のもつ軍配を作ったりするシーンが、心に残ったのであろう。

## 2) 幼児の姿と思い

1) で述べたように、学生Aは、幼児の姿についてはその場面場面ごとに表しているが、その思いについては、記述が少ない。学生Bについては、幼児の姿・保育者の姿と分けて書いていないことと、具体的な子どもの姿が記述には表されていないため、幼児の姿と思いがはっきりとは分からない。

## 3) 保育者の姿と思い

2) の幼児の姿と意思と同様、学生Aの保育者に関する記述②には、保育者の関わりの部分だけである。ただし、黒丸の部分で、保育者が“子どもの意欲を引き出す”という思いの下に、“劇あそびを普段の中から取り入れる”ことをしていることを取り上げている。

学生Bは、明確に言葉で述べてはいないが、“自分で作ることが大事”ということに、学生B自身が共感しているという言葉がある。このことから、保育者がそのような思いで、リョウガ君に関わっている場面が特に心に残ったのであろうと推測される。

## 4) 幼児と保育者の間で起こっていること

学生Aは、相撲を楽しんでいるリョウガ君の姿から、保育者がそれを劇ごっこに取り入れているところ、劇ごっこに取り入れられたからこそ、リョウガ君が小道具作りを友達と一緒にやっていることと、

そして、その小道具作りやお面作りも、保育者がリョウガ君の気持ちが自然に動くように（“お友達がお面を作った様子を見て、リョウガ君にも見せる”）関わっていること、とそのやりとりが、少し描写は足りないけれど見えていることが分かる。

学生Bは、やりとりというよりは、このシーン全体の中で自分が感じた大切なこと、という観点で記述しているように思われる。

## 4. 考 察

第4回・第6回・第9回と、学生の学修が1) から3) の観点において、構築されているのかを振り返ってみた。

学生Aは、全体的に記述量も多く、回ごとに身につけて行っていると思われたが、同時に、筆者自身の課題の出し方で、記述する内容も左右されることがわかった。筆者としては、第4回で子どもの姿・思い・保育者の姿・思いをそれぞれ一つずつに分けて書かせ、さらにそれを時系列に第6回で書かせたので、第9回では、子どもの姿と思い、保育者の姿と意思と二つに分けてもそれぞれの記述をしてきたらと思うていた。しかし、それはまだ難しいことが今回改めて見て取れた。

また、学生Bに関しては、捉えている視点は、保育者として大事なところであった。指導としては、そこからスタートして、少しずつ詳細に観察できるようにしていったり、文章を読み取れるようにしていったりと、丁寧に関わることが必要であると思われた。50人規模のクラスの中で、このような指導を可能にするためにはどうしたらよいか。それを今後は検討する必要があると思われる。

幼児と保育者の関わりの理解を深めるこの作業は、子どものことについて思いを巡らし、考え続けることである。また、保育者としての自分自身の姿や思いを内省し、振り返ることである。これら、二つのことは、保育者として実際に子どもと関わっていく上で、非常に大切になってくるため、これらの課題に取り組むことは、学生たちにとっては、保育の質を向上させるうえでも重要である。

その一方で、指導の上で、この“書く”という行為を考える必要もあると思われた。書くということは、記録として子どもの育ちを残していく上でも大

切であるし、子ども理解を深めていく上でも大切なことである。しかし、書くことは大事だけれど、「思わず書きたくなる」「書いていたら面白かった」「不得手と書いていたけれど、苦手感が少し減っていった」と学生たちが思え、その思いが保育現場へとつながっていくことの方が、非常に重要であろう。学生たち自身の「書くこと」への意欲が育つためにはどうして言った方がいいのか、それが今後の指導として考えていく必要があるであろう。

## 5. まとめ

今年度は、昨年度の研究からさらに、記録を絞り、一つ一つを詳細に見ながら、どのようなことを学生が捉え、あるいは捉えていないかを分析し、自分の

指導を振り返ってみた。記述量が多い学生は、課題として出されたこと—子どもの姿・思い、保育者の姿・思い—に忠実に取り組むことによって、保育者に必要な「考える力」を身につけていっている姿が明らかになった一方、記述量が少ない学生も、保育者としての子どもへの視点は、大切なものを元々持っていることが分かった。その部分をどのように育てていくことができるのか。書くのが苦手であったり、課題に取り組むということが得意ではなかったりする学生に対し、指導者側がどのような工夫ができるのか、今後はそこに取り組む必要があることが考察された。学生たちが卒業後、保育現場で生き生きと活動できるように、保育者養成側も常に彼らについて思い巡らし、考え続けていく必要がある。